

## 2013 年度第 2 四半期（7 月～9 月）の地質相談報告

下川浩一（産総研地質標本館）

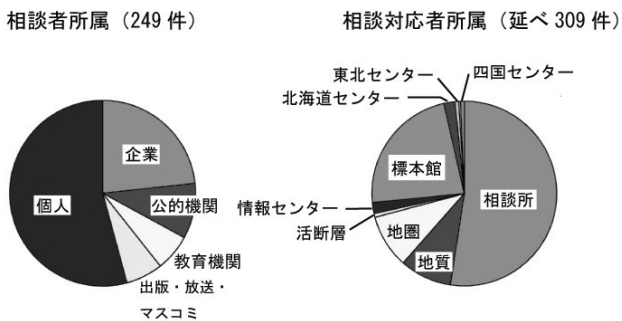
2013 年度第 2 四半期の産総研地質分野における相談件数は 249 件、回答者が複数の場合の延べ件数は 309 件で 2012 年度同期（以下、前年度；234 件、延べ 309 件）と比べて、件数はやや増加しました。また、2013 年度第 1 四半期（以下、前期；187 件、延べ 223 件）と比べると大幅に増加しました。

相談者の所属内訳では、前期と異なり夏休みの相談を含むことから、個人の相談が 135 件（54%）と半分以上を占め、次いで企業 58 件（23%）、公的機関 24 件（10%）、教育機関 16 件（6%）、放送出版マスコミ 16 件（6%）となっています（第 1 図）。前年度と比べ個人の相談が 33 件（12%）増加し、公的機関からの相談は 13 件（6%）減少しました。

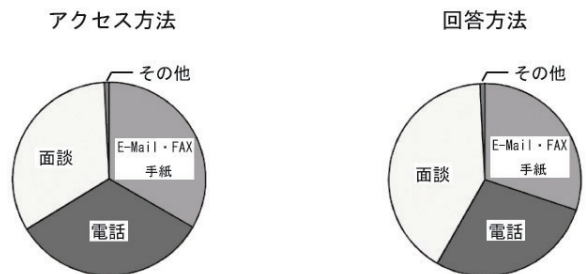
相談対応者の所属については、相談所が 162 件（52%）に対応しており、相談所に相談があったが、専門家の回答が必要のため研究者に対応を依頼したものの、または直接研究者に相談があったものが 59 件（19%）、地質調査情報センターと地質標本館（地質相談所を除く）が 77 件（25%）、地域センターが 11 件（4%）でした（第 1 図）。

相談者からのアクセス方法については、メール（ファックス・手紙を含む）が最も多く 83 件（33%）で、次に電話と面談がともに 82 件（33%）、となっています（第 2 図）。また、回答方法では、電話相談の後面談で回答することも多く、面談が最多の 102 件（41%）でした（第 2 図）。

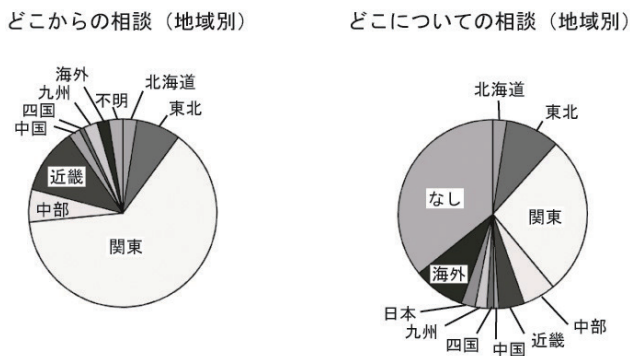
相談者の都道府県別の内訳について、今期は 33 都道府県からアクセスがありました。内訳は、茨城県の 72 件



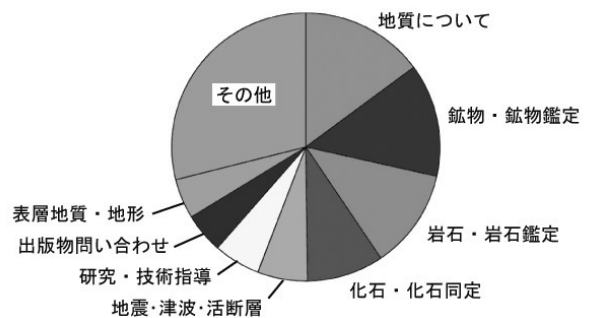
第 1 図 2013 年度第 2 四半期地質相談の相談者所属（左）および相談対応者所属（延べ数、右）。



第 2 図 アクセス方法（左）および回答方法（右）。



第 3 図 相談者所在地（左）および相談対象地域（右）。



第 4 図 地質相談内容内訳。

(29%) をトップに、東京都から 58 件 (23%)、千葉県から 14 件 (6%) など、関東地域から 158 件 (63%) の相談がありました (第 3 図)。他の地域では、兵庫県が 15 件 (6%)、宮城県と大阪府が同数の 9 件 (4%) となっています。ある特定の地域についての相談かどうかを調べてみると、半分以上 (132 件, 53%) が日本各地の地質などについての問い合わせで、外国についてのものは 22 件 (9%) ありました (第 3 図)。

今期の相談内容については、夏休みを挟んで小学生等の相談が多く、鉱物・鉱物鑑定、岩石・岩石鑑定、および化石・

化石同定を合わせると 87 件と全体の 1/3 以上を占め (第 4 図)、個人からの問い合わせでは半分以上を占めました。そのほか、地質についての質問や、地震関係、出版物問い合わせ、表層地質・地形、研究・技術指導など、多種の案件が寄せられました。企業からは地質についての相談が最も多く、地方公共団体等の公的機関からの相談は資料提供に関するものがトップでした。なお、地質図に関する相談、または地質図に基づいて回答した相談の件数は 34 件で、全体の 14% を占めています。

## 地域地質研究報告「京都東南部」地域の地質 (5 万分の 1 地質図幅) について

脇田浩二 (産業技術総合研究所客員研究員, 山口大学)

ここでは、2013 年 4 月に刊行された地域地質研究報告「京都東南部」地域の地質 (5 万分の 1 地質図幅) を紹介する。本報告の著者は、脇田浩二・竹内圭史・水野清秀・小松原 琢・中野聡志・竹村恵二・田口雄作 (敬称略) である。中野 (滋賀大学)・竹村 (京都大学) 以外は、産業技術総合研究所の所属である。ただし、脇田は地質調査・原稿作成時は産業技術総合研究所所属で、印刷発行時には山口大学の所属となっている。

「京都東南部」地域における現地調査は、平成 18～21 年度に実施した。調査研究と執筆について、丹波帯の付加コンプレックスの主部・非変成部を脇田が、同コンプレックスの熱変成作用を受けた東部と南部を竹内が、花崗岩および岩脈を中野が、古琵琶湖層群および大阪層群を水野が、高位段丘以降を小松原が、地下地質を竹村が、水資源を田口が、地下資源を中野が、それぞれ主に担当した。全体の調整は脇田が行った。

本地域には、ジュラ紀付加コンプレックス・白亜紀火成岩類・中新世綴喜層群・鮮新世 - 中期更新世大阪層群および古琵琶湖層群・沖積層が分布している。本地域で最も古い地質体は、ジュラ紀付加コンプレックスである。この地質体は、ジュラ紀を中核にした三畳紀から前期白亜紀の間、アジア大陸の東縁で海洋プレートが沈み込むことによって形成された付加体で主にメラングジュから構成されている。後期白亜紀には、珪長質の火成作用が活発となり底盤状の花崗岩体や斑状花崗岩を主とする珪長質岩脈が琵琶

湖コールドロン形成に連動して形成され、ジュラ紀付加コンプレックスに貫入している。そのうち、山科地域の弧状岩脈列が特に特徴的である。新生代になると、前期中新世末 - 中期中新世初頭には、海成層である綴喜層群が堆積した。鮮新世から中期更新世には、構造盆地を埋積する本地域北東部の古琵琶湖層群および西部の大阪層群が厚く堆積した。本地域の段丘堆積物は、高位 I 段丘堆積物・高位 II 段丘堆積物・中位段丘堆積物・低位 I 段丘堆積物・低位 II 段丘堆積物に区分される。山地・丘陵の斜面などにはマスマーブメントで形成された斜面堆積物が分布している。また、最終氷期後期以降に平野部に堆積した緩扇状地堆積物、後背湿地堆積物、自然堤防堆積物および天井川堆積物、旧河道堆積物および現河床堆積物などが京都盆地や近江盆地の平野部を覆っている。

京都東南部の地域の周辺では、京都西北部・京都西南部・京都東北部が刊行されており、本報告書の刊行により、京都 4 部作が完成し、京都盆地とその周辺の地質図が 5 万分の 1 縮尺で揃うこととなった。京都盆地は、日本の歴史においても重要な地域であるが、地質学においても、中生代から新生代にかけての重要な地質要素が分布している。本報告書を含めた京都 4 部作が、土木や環境整備などとともに東海自然歩道や近畿自然歩道などを利用した自然散策の際にも活用され、京都地域の地質がより親しまれ地質の面白さが伝わればと思う。